農民日記史料論二

―「大黒屋日記(年内諸事日記帳)」にみる地名・人名記事について―

高木俊輔

一　はじめに

前年度の紀要に発表した「大黒屋日記（年内諸事日記帳）研究序説」にひきつづき、今年度も「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」（以下では単に「大黒屋日記」と略記する）を具体的な素材として取りあげながら、農民日記に関する考察をしていきたい。

まず、「大黒屋日記」の全体的な構成についてふれておきたい。

「大黒屋日記」が残された期間は、文政九年（一八二六）から明治三年（一八七〇）にわたる四十五年間であるが、途中天保四、五年、天保七、八年の四年分を欠くので、四十一年間分である。そのうち文政九～十一年の三年分が一冊に綴じられ、文政十二年から弘化五年（一八四八）までは二年分が一冊に合冊されているので、「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」はもともと三十一冊であった。先に述べたように、昭和二年（一九二七）の島崎藤村は、この三十

第1表　大黒屋日記抄、年内諸事日記帳コピー、読み原稿の枚数相関表

日記抄No.	日記帳No.	年　度	西暦	年数	抄頁数	コピー枚数	400字枚数	年平均
1	1	文政9－文政11	1826－28	3	67	85	123	41
2	2－5	文政12－天保11	1829－40	8	56	230	371	46
3	6－13	天保12－嘉永5	1841－52	12	88	518	984	82
4	14－16	嘉永6－嘉永8	1853－55	3	63	204	353	118
5	17、19	安政3、安政5	1856、58	2	47	134	217	108
6	20－21	安政6－安政7	1859－60	2	39	132	217	108
7	22－23	万延2－文久2	1861－62	2	50	133	213	106
8	24－25	文久3－文久4	1863－64	2	54	131	208	104
9	27－28	慶応2－慶応3	1866－67	2	42	119	193	96
—	29－31	慶応4－明治3	1868－70	3	—	181	250	83
—	18、26	安政4、慶応1	1857、65	2	—	133	216	108
計				41	506	2000	3345	82

一冊を全部見たわけではなく、慶応三年（一八六七）までの二十八冊のうち二十六冊分を見たのであって、十八冊目（安政四年）と二十六冊目（慶応元年）を欠いたまま「大黒屋日記抄」という筆記録を作成したのであった。

島崎藤村の「大黒屋日記抄」と原史料「年内諸事日記帳」、それに本文の解読原稿の四百字数換算枚数の相関関係を示したのが第1表である。原史料の枚数は四十一年分三十一冊でおよそ二千枚、解読文は年月日を除いた本文の原稿枚数（四百字詰換算）でおよそ三千三五〇枚となった。原史料は、一冊平均六十五枚、本文だけの年平均原稿枚数はおよそ八十二枚の分量となる。藤村の「抄記」の分量は、文政から天保期が比較的に少ないが、それはもともと原史料「年内諸事日記帳」の記述が簡単であったことにもよっていることがわかる。

「大黒屋日記」の記述が詳細になってくるの

は嘉永六年（一八五三）のペリー来航以後である。藤村の「抄記」も、『藤村全集』第十五巻のページ数で年平均二十ページを越えるようになり、それは本文解読原稿枚数が四百字詰で年平均百枚前後となることと対応している。この開港以後の幕末期の詳細な記述が藤村を動かし、厖大な「抄記」を残させたともいえよう。藤村は「抄記」の記述を『夜明け前』第一部にひろく生かしていく。ただ、この「大黒屋日記」の記述者であった大脇信興が、明治三年（一八七〇）に死亡したことと関わって、慶応期からの記述に若干減少傾向がみられる。それは、老いからくるものであったと見てよいようである。しかしながら、日記記述の最後まで端正な字を書き続けた大脇信興の精神力の強固さにうたれるのである。

さて、私は今回解読した「大黒屋日記」を次の形式によって全文テキスト化してみた。たとえば、年度は当面一八〇〇年代の日記に限られているので千と百の位を省略し二ケタで示し、月は閏月を考慮して三ケタで示し、日は二ケタとした。日記の内容を示す記事本文は、天候に関するものを1として記入し、記事毎に2以下の項ナンバーを付し、その後に記事として本文を示した。記事本文の長さは二字から五、六百字を越えるものまできわめて多様であるが、検索などの処理には支障はない。文政九年から明治三年までのすべての項の数は四万二千二百七件（点）に達した。項ごとの記事についてその長短を考慮しないで単純に年平均の項数をみるならばおよそ百件、一日平均およそ三件の記事を書いていたことになる。

本稿は、この「大黒屋日記」の全文テキスト化によって得られた四万二千二百七件（点）より分析の手始めとして地名や人名記事を取り出し、その傾向性を把握する試みをしながら大黒屋大脇家、ひいては馬籠村と近隣村々との地域的な関わり方、また村々の人物関係記事を通じて「大黒屋日記」に書かれている人物像の特徴を把握したいと思うのであるが、現時点では中津川の事例を中心にして考察していくことにしたい。

二　「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」の地名記事について

地名については、まずこの「大黒屋日記」中にどれだけ馬籠村内外の村々の名前が登場するのか、をみておきたい。つまり四一年間の日記中に登場する村名の頻度から、大黒屋や馬籠村との関わりの度合いを探ろうとするものである。

この「大黒屋日記」は、大脇信興の個人的な日記であることから、村名の登場頻度からその数量を以てただちに馬籠村や島崎家の位置そのものを論じることはできないが、傾向性をはかる上で有効であると判断しているので、数量的な把握から入っていきたい。

地名（旧村名）をふくむ項目数の検索結果を数量だけ示したものが、第2表である。なおこれは、たとえば中津川であれば、「中津川」という用語を含む項の数を集計したものである。なお、現在の中津川市は「駒場」・「苗木」・「千旦林」・「茄子川」などを含むが、ここでは「中津川」といってもより限定された村域を指している。福島には「福島」の他「福嶋」・「福しま」などを含み、妻籠には「妻籠」・「つまご」・「つまこ」などを含み、同じ村はできるだけ網羅するようにつとめた。大井には「大い」を含み、須原には「すはら」・「すわら」のひらがなの表示を含む。湯舟沢には「ゆ舟沢」・「湯船沢」を含み、三留野には「三との」・「三どの」・「ミどの」を含み、荒町には「あら町」を含み、飯田には「いい田」を含む。

数量的にみれば中津川が圧倒的に多い。つまり、大黒屋大脇氏の関心が美濃中津川の方向に向くことが多かったことがわかる。このことがいかなる意味を持っていたかについては、それ自体が本稿の考察課題でもあるので、後にまた検討することにしたい。中津川のつぎに多いのは木曾の代官所のあった木曽福島である。福島に関しては、出勤・

出張など馬籠村の村役人としての公務で関係する記事が多くでてくることは予測できないことではない。幕藩的な支配の木曾地方における窓口となった福島役所との関わりを示す記事が多いことも特徴的であるが、この点も後で詳しく検討する機会を持ちたいと思う。

第2表　「年内諸事日記帳」記事件数表

1. 現山口村外

	地名(村名)	件数
1	中津川	2317
2	福　島	1463
3	妻　籠	1015
4	大　井	983
5	山　口	966
6	落　合	821
7	須　原	650
8	飯　田	650
9	入　山	473
10	湯舟沢	424
11	三留野	390
12	岩　村	342
13	野　尻	331
14	坂　下	208
15	苗　木	199
16	茄子川	182
17	上　松	116
18	善光寺	87
19	大　湫	81
20	蘭	77

2. 現山口村内

	地　名	件数
1	峠	803
2	下　町	307
3	荒　町	281
4	新茶屋	248
5	町　内	244
6	丸　山	234
7	中ノカヤ	231
8	背　戸	156
9	草　山	156
10	比丘尼寺	140
11	蟻垣戸	87

第2表から明らかなように、つづいて妻籠・大井・山口・落合・須原と旧馬籠村の近隣村が多い。山口村は後に馬籠村を包みこむが若干中山道をはずれて別の街道に属すので除外すれば、そのほかの村々は木曾十一宿を構成する宿駅であり、そのうち美濃の大井を除けば福島への道沿いの宿駅である。これらの村々の記事には、福島役所への往来の途中で様々な関わり合いをした要素を含むものであることは確かである。

つぎに指摘しておきたいことは、いわゆる馬籠村から現在の山口村内に入る村々が多いことである。たとえば峠・荒町・町内・中ノカヤ・新茶屋・下町・背戸・草山・比丘尼寺・蟻の垣戸・今渡などである。中には現在では小字からも消失してしまったものもあるが、当時の馬籠村に住む人々にとってもっともなじみの深い空間であり地名であっ

たといえよう。これらの村の項数を合計すると、中津川の数を越えて二千六百件以上になる。この「大黒屋日記」がいわゆる村内の出来事に最大の関心を持つ村人の手によって書かれたことにより、当時の村社会の多面的な情報を与えてくれるものであることを、この点からも指摘しておきたいのである。

先に、「大黒屋日記」に項目としてでてくる地名関係の記事は圧倒的に中津川が多いといったが、第2表の中津川二三一七件という数字は、同「大黒屋日記」四万二千件あまりの件数のうち中津川という言葉を含む記事数が二三一七件あるということを示している。これは馬籠村の隣村妻籠村一〇一五件の倍以上であり、大黒屋大脇家は信濃の奥地の方とは反対の方角に当たる南の方の美濃中津川・大井方面に深いつながりをもっていたのである。またこのことは、隣家島崎家も同じように中津川とのつながりが強かったことを連想させるものである。

ここでは、中津川を例としながら、地名に示した記事の集約のために、つまり村ごとに括った記事群にさらに立ち入って検討していく手がかりとして、いくつかの「用語」を設定していきたい。全文テキストから地名を抽出したうえで、それぞれの地名が「大黒屋日記」の記述者大脇信興にとって持った意味を、さらに言えば馬籠村にとって持った意味を、「用語」（言葉）の検索を通じて具体化する試みをしていきたいのである。

①福島・出勤・出張・役所・役人

「福島」は、木曽福島代官所が置かれていたところであり、役所・役人などの言葉はほぼ福島代官所と関連し、年寄り役大脇家の村役人としての公務に関わる記事である。「出勤」は、明らかに村の公務で出かけたことを示す用語であるが、中津川の場合は他と比べて「出勤」という用語の頻度は少ない。それよりも公務であることを

若干含みながら私的用向きで出かけたことを示す「出張」という用語の方が圧倒的に多い。つまり馬籠村大脇家と中津川村との関わりは、私的あるいは商用・交際的な傾向が強かったのである。

②通行・継・止宿・泊／休・逗留・滞留

中津川では、通行・往来関係記事が圧倒的に多い。ここには参勤交代の行列の通過や江戸参府一行の宿泊などやや公務を含む。中津川や馬籠村の宿場としての位置からこれに関する記事の多いのは当然であろう。

③参・出・帰

村の出入り・行き来を示す用語としてこの三つの用語で検索してみると、二千件を越える。これは馬籠と中津川との往来の多さを如実に示している。それは必ずしも支配と関わった行き来ではなく、日常的な細々（こま）とした雑多な用件での往来でもあり、多分に生活に密着した形でのつながりであったことは、本稿の主張点の一つにあたる。

「参」はその村の者が来ることを示す「…ニ参ル」「…ヨリ参リ」などと、その村へ行くことを示す「…ニ参リ」「…迄参ル」「…へ参リ」などと、両方の意味がある。「被参」も行く、来るの意味が半々である。

「出」は普通は「出立」「罷出」のように馬籠村から出ていくことを示しているが「御出」は馬籠村へ来ることを意味することが多い。

「帰」は「帰村」「帰宅」など中津川村から帰る意味と、「…迄帰ル」「…へ帰リ候」などのように中津川へ帰るの両方の意味を含む。

④恵・貰・被下、誂・払

まず「恵」・「貰」・「被下」は受け取るの意味で使用している。そして「被下」は次のような「御立寄被下」「御出被下」「御知らせ被下」「出席被下」「御越被下」「見舞被下」などの例を除けば、贈答の意味を示す。一方「誂」は贈答の贈与する側を示している。

⑤祭・芝居・狂言・見物

これらは中津川で催された興行に関する記事である。中津川は他の村に比べて二倍以上の件数がみられる。これは中津川で催されたものを馬籠村から歩いて見物に行ったことが多かったことを示している。操（あやつり）・上るり（浄瑠璃）の件数はいたって少ないが、興行的な在村文化の享受は中津川によって与えられていた側面が強い。

⑥無尽・講

いわゆる庶民金融あるいは村方における相互扶助の一環として営まれた無尽・講は、「大黒屋日記」に頻繁に出てくる用語の一つである。「無尽」は九九四件、「講」は三五八件ときわめて多い。馬籠村や近隣諸村の村役人層の発起によるものが多いが、まだどこの村の者か不詳の者による無尽や講が頻出する。そのうちの多くが馬籠村内で発起されたものではないかと思われる。

⑦米・買・借・頼・渡・請取・勘定

ここでは、日記に現れる商取引や商経営の側面を検討するために、「米」以下の用語を取り出して、同じく中津川を例にして検索をおこなってみたい。「米」については、米吉・米蔵・米田屋などという人名を除かねばならないが、米代金の支払い、米相場のこと、飯米の買い入れなどの記事が多い。米商い・米仕入れ・米の附払いのこと、借金の利足の決済を米でおこなうこと、などがわかる。また、中津川御蔵米の入札・開札や米切手書替などの記事も出てくるが、米を中心にした動きがわかる。

「買」は村落における購買の実態を示すもので、中津川の八十件余りの例で一番多いのは、蛹（繭）の買い入れであり、つぎに多いのは米や酒の買い入れである。また塩や肴・鮪など食べ物が多く、他には着物・浴衣地・糸、手塩皿・かめなどの陶器、小脇差・駕籠・馬鞍、畳表・金物・釘・道具類、油ひし・とぼし油などと日常品まで書かれており、「葬式之品」まで出てくる。

「借」は借用金・借入金がほとんどである。その金がいかなる理由によるものであるかの追究が必要になってくるが、その要因としては米の買い入れ、勝手不如意、急入用、などが目につく。これらについては、別に立ち入った考察が必要であろう。他に借地・借家などもある。「渡」は「金子相渡」の例が多い。米代金・薬種代金・無尽金・店勘定・預り金などを「相渡」という形の表現が多い。「請取」も金子に関わる内容がほとんどであるが、といって金に関するものだけではなく、商品、売り物への支払いの例も含んでいる。「勘定」は、多くは商人の「店勘定」「店払勘定」という商家の差引勘定という決済を示している。大晦日に「村中一同諸勘定相済」した上で、新年を迎えることがおこなわれていた。

以上、地名記事からその特徴付けをするという意図のもとに、やや遠回りをしたのかも知れないが、中津川という

個別具体的な村を取り上げ、このような用語の設定によりその用例の比較検討を通じ、地域的な特徴を把握することが可能になってくるのではないか、としてみてきたのである。もちろん、地名からだけでなく、地域的な特徴付けにはいろいろな方法を駆使しなければならないであろう。以上の考察も、一つ一つをとってみれば、より立ち入った考察を必要としていることは当然である。ここでは、用語の検索を通じて日記の内容探究の一端を示してみたのである。

三　「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」の人名記事について

ここでは、地名の節と同じように「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」中に、どれだけ村人の名前が登場するのかを見ていきたいのであるが、最大の問題点は、馬籠村に関する宗門人別改帳が一冊も残っていないことから、容易に村人の名前がわからないことであり、また、同じ人物が異なった名前で出てきても同人と判断できないことである。そこで、人名に関する当面の考察はきわめて大雑把なものにならざるを得ない。

馬籠村では、大黒屋が大脇家、八幡屋が蜂谷家というように屋号とその家の姓が判ればいいのだが、和泉屋・扇屋・井筒屋・稲葉屋・角八屋・問屋・丸亀屋・三浦屋などが、このような屋号の他にどのような名前を使っているのかが、現在の段階では追究することが出来ない。そのため、個々人にいたるまでの情報を詳細に抽出することは出来ないが、概略のところで、馬籠村四十一年間に「大黒屋日記」に登場する人物を多い方から示せば、第3表のようになる。

馬籠村の人物では、表から判るように本陣・吉左衛門つまり島崎家に関する記事数が圧倒的に多い。この村がなお

庄屋である島崎家を中心として営まれていたことが、また大黒屋の隣家としての関わりの濃さが、日記記事数の多さとなって示されている。大黒屋が自分の家に関して書いた記事数よりも多く、一、五倍の数である。日記が自分および自家とその身辺について記す性格があることから、大黒屋の多いことは当然であるが、島崎家の記事量は突出している。三番目は、馬籠村の旦那寺永昌寺であり、この寺の村人に対する日常的な関わりあいの強さを物語っている。

第3表　馬籠村

名　前	項数
本陣・吉左衛門	1168
大黒屋・兵右衛門	790
永昌寺	726
八幡屋	661
和泉屋	447
扇屋	441
問屋・三右衛門	384
丸亀屋	158
井筒屋	111
稲葉屋	100
中ノカヤ・五兵衛	119
峠・仁兵衛	210
峠・平四郎	170
永昌寺・おちよ	144
大黒屋・お玉	152

第4表　周辺村

村名	名　前	項数
中津川	羽間半兵衛	946
中津川	大津屋菅井嘉兵衛	437
中津川	馬島靖庵	239
中津川	大坂屋　桑蔵	134
中津川	肥田九郎兵衛	52
中津川	市岡長右衛門	49
山　口	外垣三右衛門	408
山　口	楯　藤十郎	111
落　合	泉屋鈴木利左衛門	437
落　合	山田太助	95
坂　下	曽我杏造	100
妻　籠	島崎与二右衛門	88
妻　籠	林六郎右衛門	42
三留野	宮川六郎右衛門	286
須　原	西尾治郎左衛門	309
須　原	金ト源次郎	128
福　島	冨屋忠四郎	63
福　島	山村甚兵衛	47
福　島	高瀬晋助	41
西　尾	現金屋　禎助	71
京　都	伊勢屋　久兵衛	169

第3表からは、馬籠宿脇本陣の八幡屋、問屋の原三右衛門、つづいて丸亀屋・井筒屋・稲葉屋など馬籠の宿場の主要な家に関する記事の多いことが判る。加えて、中ノカヤの組頭五兵衛、峠部落の組頭仁兵衛と平四郎、と記事の多い人物がつづく。馬籠村にとって峠部落は、米の生産が出来ない高地で、ほとんどの者が牛方をして生計を立てていた地域であった。つまり、幕末段階に、次第に農民の荷物の運送量が増えた時点で、この地方の流通・運

輸に重要な役割を果たすようになっていた牛方の動きと関わる記事の多いことは、牛方の動向がこの山村のキーワードのひとつになっていたことを予測させるであろう。

馬籠村の周辺村で、日記中に立ち現れる人物を多い順に二十人ほど取り出し、それを村ごとに示したものが、第4表である。馬籠村以外では、中津川村が人名においても、もっとも多く登場する。そこで、ここでは中津川村に限って、個々の人物ごとに記事数の確定の仕方をめぐって若干ふれておきたい。

中津川村でも「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」に一番多く立ち現れるのは傘（山半）間（羽間）家である。間家あるいは間一族については、屋号である傘と半兵衛とで七百五十項以上を抽出することが出来るが、その他に別称である十八屋・十八や、杢右衛門・忠七なども加えると関係する記事が網羅できるであろう。しかし、半兵衛からは寺道半兵衛・羽鳥半兵衛・亀子半兵衛などを除き、忠七からは角八屋忠七・扇屋忠七を除かねばならず、また杢右衛門からは山口・楯・湊屋・大井・羽鳥などを除き、間あるいは羽間家以外の人物を除外する必要がある。このように、つとめて除外すべきものは除外したが、まだこの中には間家でないものが含まれている可能性はなしとしない。とりあえず、米や大豆などの穀物を手広く商うとともに塩の売買をとりしきり、金融業も営んでいた間家と大黒屋とのつながりはきわめて強かったことが指摘できよう。

つぎに多いのは大津屋である。大津屋菅井家は、間家のおよそ半分くらいの頻度で登場する。大津屋は大つ屋・大津や・大つや・お、つやなどで出てくる。また菅井や嘉兵衛・治郎平・次郎平・九三・九蔵・三九郎・次郎などでも出てくる。中津川在住の郷医馬島（馬嶋）靖庵は、馬籠村も診療の範囲であったから、馬籠村で病人が発生すると往診をした。そこでしばしば日記にも登場することになるのである。大坂屋は、大坂や、桑蔵・兵六・吉兵衛などで出てくるが、これらの名前には多くの姓が関係するので、まだ大坂屋以外の記事が混入している可能性がある。つづい

て、百項目以下ではあるが中津川の有力村役人の肥田家と市岡家の記事数を出しておく。

このようにしてそれぞれの人物ごとに、屋号やいくつかある人名から関係する記事を確定してきたのだが、第4表は、さらに、落合村、坂下村、妻籠村、三留野村、須原村、福島村、西尾村、京都などの、比較的に日記中に登場することが多い人物あるいはその家について示した。当該人名に関する記事であることを確定するには、その人物が一生の間に使用したいろいろな名前を把握しなければならないし、複数の人物が同じ名前を使う点にも留意しなければならない。その意味でいえば、以上のような多面的な検討をするという作業は徹底していないので、ここに示した数字はまだ不確実なものであることをお断りしておきたい。

さてつぎに、それぞれの家に関係する記事を通じて、山半・十八屋、大坂屋、肥田九郎兵衛、市岡長右衛門などがどのように描かれているか、また大黒屋との関係がどのように描かれているか、を個々にみていきたい。なお、馬島(馬嶋)靖庵については、郷医または在村医療の問題と関係させて別にふれることにしたい。

山半間半兵衛の記事で目立つのは、金子支払、米代・木代の支払あるいは借金、年賦金受取などに関するもの、また直接の支払いではなく金子を預けるケースも多い。それから「誂」(あつら)えるという表現で、贈答や差し送る意味の使い方が多い。米代・無尽懸金など金子の例もあるが、風呂敷・紙入・摺箱・状箱・手紙・日笠・菓子・菊の花・たばこ・鶏などに年玉・祝儀・山ノ芋・振舞酒、それに楠公記などがある。一方、大黒屋が山半より貰ったり受取った物には、手紙・硯蓋・うり・初茄子・糀・味噌・生鮎などがある。人物の往来関係では、山半から「御出」になったり「参」るケースで年始年礼・年玉・無尽会合・葬式・馬引などと、公務での「役向御出」や、商経営の上での「蛹買」のため「立寄」る場合もある。その他、中津川関係の死去のことなどの情報が伝えられている。以上のように、金子に関する記事、日常的なこまごまとした贈答・義理に関するもの、商取引に関するものなどがある。隣り

合う村と村の代表的な人間たちの家族ぐるみのつきあいの要素もみえる。参宮や入湯の途中に立寄るといったケースも多く、畑でできた収穫物（梨子・しめじ・真桑瓜・茄子）や自家製の味噌・糀などの贈答が多い。それは特に山半おらいに関する記事に多い。

十八屋に関する記事についても、金子関係が圧倒的に多い。間家の金融面あるいは資金繰り面を担当したのが十八屋ではなかったかと思われるのである。大黒屋から十八屋へは金子支払・金談・急入用「時かし金」のこと、無尽掛金誂えのこと、紺屋へ勘定差引で金子を遣したことや餞別など、金銭そのものの記事が多い。また「手紙並金子入状箱」、「借用金証文並手紙相添」、「封金状箱へ入」、「古券書入質物差入」など、金銭関係の書類・手紙も多い。なお、金子に限らず大黒屋から十八屋へ遣わしたものは、「婚礼祝儀」、「返しもの」、「見舞」など冠婚葬祭に関するものが少なくない。大黒屋側から十八屋へ出かける時も、葬式・慶事披露・仏事など冠婚葬祭に関するものがほとんどであるが、「勘定」とか「無尽取立」のような金子に関わる記事も出てくる。

一方、中津川十八屋から馬籠大黒屋へ来る場合には、「店卸不都合ニ付内輪相談」、「万端内輪相談」、「酒蔵普請ニ付相談」、などの用件が多く、商取引面でかなりの親密さを示している。「無尽之儀ニ付」、「金子借用ニ参」など金銭関係も多いが、「勘定」、「店勘定払」、「蛹買」、「蛹仕入」、「蛹仕入金借用」、「〇〇一件ニ付」、「箱荷物送り」、「馬引」など商経営に関わるものが多い。「糸」については十八屋が横浜交易で出かける途中で立ち寄っている記事があり、十八屋には荷問屋的な側面をみることができる。

その他では、不幸・悔・仏参り・見舞・祝儀など冠婚葬祭に関する記事、お礼・あいさつ・迎へ、などの交際関係があり、縁談披露のこと、「結納相談嫁引取日限相談」に来るなど、ここでも親密な付き合いがみられる。また十八屋が来村した時のことであるが、大黒屋に泊まるほか、馬籠宿内のどこに泊まったのかについての記事も少なくない。

十八屋は、中津川の動きや人々の生誕・死亡、消息などの情報の提供者でもあった。土産品の受取り（例えば扇子・筆）、すいか・川魚・木瓜などの貰い物など細かいことがらも記している。このように、記事の内容は整理して書かれているのではなく雑多なままであり、このことがかえって日常的な交流の深さを示している。

肥田九郎兵衛と大黒屋の関係は、それほど古くはなく天保十年代から記事が出てくる。はじめ予六名で出てくるが、屋号は田丸屋で安政三年（一八五六）から九郎兵衛となる。まず九郎兵衛が福島役所や飯田行の途中に立ち寄る例が多く、九郎兵衛が中津川の庄屋として広くこの地域と関わっていたことが示されている。もちろん、公務としてばかりでなく、無尽の発起人となったり無尽会合に出席するなどで付き合いがあり、酒造売捌きなどの記事から酒屋を営んでいたと思われる。「忌明け」には大黒屋へ礼に来たり、馬籠へ来るときは練羊羹や半切紙を土産に持参するなど、一般的な社交儀礼を交わす間柄でもあった。九郎兵衛が際だった動きをするのは、慶応四年（一八六八）三月からである。「御一新」に際して村人がいろいろな形で行動を起こすようになったとき、平田門人でもある九郎兵衛は、東山道総督府の岩倉兄弟のお供をし、山の民の一揆的な動きに対していち早く尾張藩への嘆願に出かけるのである。閏四月四日の記事に

「中津川肥田九郎兵衛殿千賀様御用ニ付当宿御泊り迄御出張被成、私方へ御泊り被成候」

とあり、五月二十九日には、木曾谷は百姓一揆の様相を示し、多くの村人たちが集会・結集し関の声をあげていた。この時、

「肥田九（郎）兵衛殿ニハ直様尾州表江御達しニ参り候様子ニ噂承り申候」

とある。彼は、山の民の「暴発」を未然に防ぐことになるが、村役人としての動きに反して「大黒屋日記」からは、肥田家の経営などがわかるような記述はほとんどない。

市岡家も組合総代や村役人として、「中山道筋中通し人馬引合請方」として、出張の途中で立ち寄った関係の記事が大半を占めている。市岡氏の行先は、木曽福島が圧倒的で、飯田との往来もある。十五両無尽を発起したり金銭の借用を依頼したり、金銭と関わっているのは当然だが、大黒屋に立ち寄る時には土産として、徳利・たばこ入・扇子・さかな・「唐紙半切掛物一幅」などが書かれている。冠婚葬祭関係では、市岡の老母の死去に際して「香典線香弐把」が誂えられている。なお、肥田と市岡両人に関する「大黒屋日記」からの検索例のみを、第5表、第6表として提供しておきたい。記事数が少なく簡略だからである。

中津川の最後として大坂屋についてみておこう。中津川桑蔵・大坂屋吉兵衛・大坂屋兵六などの名で大坂屋に関する記事が出てくると判断しているのだが、大坂屋の構成人名についてはまだ不明確な点が多い。大坂屋の記事には、無尽会合に出席したり、無尽を取り立てたり、無尽金渡し、金子請取、利足金渡しなど、年賦済仕法立てや年賦済金貸付など、村の中の金融に深く関わっていた家のようにみえる。飯田行きや、御嶽山参詣などの機会に大黒屋に立ち寄ることが多いが、飯田行きには蛹買・糸買入の目的があり仲買商的性格がみえる。また質流地の入札にかかわり、「山口村田地一条」など土地取引を思わせる点があり、地主的側面を持っていたものと思われる。一方で、大坂屋では、女義太夫・江戸女常磐津・三味線・しんない・上るり・軍団噺などを催（興行）しており、文化的な側面が目立つ。この大坂屋でも、大黒屋との贈答では水引・風呂敷・しゅんけいうるし（春慶漆）・名吉・川魚などが出てくる。

＊付記、本稿は、平成八年、九年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）による研究の一部である。記して謝意を表するしだいである。

第5表 肥田九郎兵衛関係記事

番号	年：月：日	記事
1	41 80 7	中津川田丸屋忌明ニ付与六殿・鎌七殿御両人御礼ニ御出被成候
2	43 40 11	翁塚供養執行ニ付落合中津川御社中御出席被下候御名前　宗泉寺和尚様　御土産盃壱、かねさじ二本、市岡長右衛門様御土産品　徳利壱ツ、肥田與六様、羽間杢右衛門様　練羊羹箱入壱・半切紙百枚・地紙色扇子壱、羽間忠七様　箱入杯壱ツ・扇子壱対、外ニ長門屋友八　附添、落合鈴木利兵衛殿　是者此度宗匠代役御勤被下候、湯舟沢嶋田耕作殿　地紙包扇子壱・生椎茸壱連、山口外垣三左衛門様　御土産鶏卵十五
3	43 40 19	中津川信濃屋健治殿飯田行ニ付肥田与六サより本陣・蜂谷両家へ画遣被成差上申候、尤書状相添至来
4	43 60 7	中津川肥田氏より極内密書状至来
5	43 110 17	当十五日福島御役所より御奉行御出張ニ而諸事商物直下ヶ被仰付、表へ正札之張出被仰付候、昨十七日御出立山口村へ御越被成候、御役人肥田弥五八殿・松島　酒造売捌直上之処御願申上、則元帳御覧ニ入候処御預り被下御持参被成候
6	43 120 3	岩井肥田氏へ此方より返書又々申遣候、尤其節大津屋行並御代官様利足金共御訛へ差遣申候
7	47 100 16	中津川与六殿・岩井庄次郎殿福島帰り御立寄暮合迄遊帰宅被成候、屏風掛物御覧ニ入申候
8	48 90 20	中津川田丸屋与六殿蜂屋へ悔ニ御出被成候ニ付御立寄、半兵衛落合へ稽古見物ニ参り居候ニ付与六殿へ同伴ニて七ツ頃より落合へ参り申候
9	48 100 21	丸ト無尽会合ニ付中津川より与六・半兵衛・嘉兵衛相見申候
10	49 110 11	大津屋お京サ事先月上旬少々内輪機嫌不宜当方江遊ひニ被参居候処兎角本地致候事相断申度段々内輪相糺候処至極尤とも被思候ニ付、右離縁之義与六殿・半兵衛両人迄申入置候、追而中津川親類中より挨拶可有之筈ニ御座候
11	49 110 12	半兵衛病気ニ而引籠居候ニ付拙者壱人岩井氏江罷出年賦済年限済ニ付御礼申上金子拾両御主人江相渡申候、尤御招キ被下与六殿ニ附添参ル
12	49 110 12	同夜出席御目附太田長左衛門殿・下山織之進殿・拙者・与六殿・金七殿・嘉兵衛殿御主人ニ而御馳走ニ相成九ツ時頃帰リ傘ニ泊ル
13	49 120 1	お京サ一件ニ付与六殿長門屋友八同道ニ而御出被成夜ニ入御帰り被成候
14	51 60 20	大湫宿森川清左衛門殿発起無尽之儀ニ付二番口肥田氏御取口と相極リ候ニ付百五十両講半四郎加入可致候様与

				六殿・嘉兵衛御両人より友八との御頼私方迄御遣被下候、然ル処今朝右無尽半口加入之儀嘉兵衛どのへ御答え手紙差上置候間其段左様御承知被下御帰宅之節御伝声可被下候様申入酒茶漬振舞御帰り被成候、尤半口七十五両分加入いたし候
15	51	90	30	染分手綱後藤周貫団七九郎兵衛夏祭り
16	52	20	13	中津川田丸屋与六悴篤太郎当年弐拾弐歳、同所綿屋利右衛門娘と引合懇ニいたし居候処両人共家出いたし東逸老墓所ニて変死被致今夜明方見出し候ニ付、十八屋半兵衛方より右之趣知らせ夫半六参り申誠ニ驚人気之毒察申候
17	55	30	13	肥田与六殿御用ニ而福島へ御出張御立寄被下候
18	55	30	27	中津川田丸屋与六殿福島出張御用済ニ付御帰夜五ツ時御立寄被下候ニ付半兵衛方遣候、金子拾両包外ニ弐朱ト五匁入詰へ遣ス、直ニ御帰り被成候
19	55	60	7	肥田与六殿並文七両人飯田行立寄、茶漬済早々出立被成候
20	55	60	11	与六殿・文七飯田より帰り又右衛門方ニ暮合迄遊、武一郎様為十殿御同伴御帰り被成候
21	56	10	17	中津川半兵衛始メ九郎兵衛・嘉兵衛今日当方へ御入来之由頃日より先触有之候ニ付待受候処御出も無之候
22	56	60	15	中津川肥田九助隠居長病之処御死去ニ付しらせ飛脚参り候
23	56	70	18	中津川肥田九郎兵衛殿方忌明ニ付先達而悔礼ニ九郎兵衛殿・正次郎殿・森三郎三人御出被成上大黒屋ニ而八ツ半時迄休足
24	56	90	12	山村旦那様恵那御登山中津川ニ六日逗留被遊御出立ニ相成、役人市岡・肥田・岩井久助・万兵衛・半兵衛・守三郎並落合宿庄屋殿御見送り御供有之、八幡屋源十郎方御昼休尤も御材木方成瀬新蔵様御昼休本陣入ニ付右御昼源十郎方ニ而相勤、源十郎義岩村留主中ニ而拙者共罷出万事取斗申候
25	56	90	12	御出立之砌肥田九郎兵衛・久助・万兵衛野尻迄御見送被仰付御供申候、市岡氏・杢右衛門殿・半兵衛・守三郎・庄蔵殿拙家へ御立寄ニ而暫休足被成、八ツ半時御帰宅被成候
26	57	50	7	十八屋半兵衛方と当春より儀絶ニ相成居候処、右和睦一条取扱被成下候咄ニ而九郎兵衛殿・嘉兵衛・落合利左衛門殿、右三人連ニ而御出被成八幡屋へ御泊り被成候
27	57	50	8	然ル処石作団之丞様岩井一条ニ付尾州出府助七殿方迄先般御出張之処、今晩御引取田丸屋ニ御止宿ニ付手紙を以半兵衛方よりしらせ参り、俄ニ九郎兵衛殿・嘉兵衛・利左衛門殿共四ツ時頃出立御帰宅被成候、半兵衛拙者方一条も談判中ニ候得共無拠儀ニ付当方親類中共相談之上半兵衛方より断申出候ニ付、先々儀絶之段者相方和熟之趣ニ御取扱被成下、於拙者も残念之次第ニ者候得共先々一応者承知いたし候、上大黒屋相続方之儀者当方

				了簡ニ有之候間半兵衛方ニ而世話致間敷候趣是者急度申遣候、先々一旦之処中なをり音信贈答も相互ニ可致候様内得承知致候、追々右三人之衆よりも又々御挨拶可有之筈ニ御座候
28	58	110	10	中津川九郎兵衛殿福島行御立寄被下候
29	59	50	23	森川無尽金弐両弐朱銭百十七文包書状相添肥田九郎兵衛殿へ差出申候、使牛平四郎
30	61	20	18	江戸本阿弥兼三郎殿西筋より宿々剱類目利被成候ニ付御頼剱類御覧ニ入候様太田宿より中津川江申参、中津川ニ六七日御滞留ニ而市岡・肥田御両人御添翰を以当宿本陣江御入来被成候、拙者共多用並焼失後万事取込ニ付得御覧ニ入不申候
31	63	40	2	中津川肥田九郎兵衛殿仙台様御出入御用達ニ相成此度木曽御案内御見送りとして本山宿出張、混雑ニ付表迄一寸御立寄被下候
32	64	100	26	肥田九郎兵衛殿・おすめとの・傘市太郎飯田行ニ付参り、おむつ同道広瀬泊りニ而出立被参候、上ニおゐて茶漬振舞賑々敷事ニ候、外ニ何事も無之候
33	64	101	7	肥田九郎兵衛殿・間市太郎飯田帰り広瀬泊りニ而帰り、隠居ニ而暫御休直ニ出立帰宅被成候
34	65	20	23	中津川田丸屋九郎兵衛殿より蓮苗御頼ニ付掘セ幸イ此度召使友吉名古屋迄雛買入李助より申越候ニ付迎ニ差遣候便りニ差上申候
35	65	40	24	中津川大坂屋兵六殿内密用ニ而当方迄御入来被成候、右用ハ此節談判中峠又蔵控田地元方仁兵衛方江買戻シ度一条ニ付頃日備前屋源四郎殿御出被成本陣ニ御逗留相方欠合舟談聞届ニ参居由、右之儀如何ニ取斗候哉内密ニ而中津川庄屋肥田九郎兵衛殿より兵六殿内輪すべりニ御遣シ被成候由又咄有之候、委細兵右衛門と両人ニ而御咄申上候
36	66	50	13	兵右衛門上京長右衛門より書状ヲ中津川肥田より手続ニて届、病気も追々全快之よし
37	66	50	18	京都行兵右衛門より中津川肥田九郎兵衛殿迄薬紙参より今朝拙家へ御遣被下候、其節御見舞品被下候
38	66	110	18	中津川肥田九郎兵衛殿・嘉兵衛殿半兵衛手紙持参被下御立寄被下、委細承りエンダン相調、今時分内室付添中津川へ二夜サ御帰被成候
39	67	30	15	菅井森之助・肥田九郎兵衛殿並次郎平内方おきしとのいい田行ニ而皆々御立寄被下候、昼支度者八幡屋ニ而相済広瀬村泊りニ有之候、当年我等両人とも七拾壱歳ニ而古希之祝ニ付少々成共客人相招申度候得共何分世間一統米高ニ付上ミ江も恐入候ニ付無拠差控へホンノ内祝い而已ニ而並飯餅米四俵村中軒別くばり申候、町内百廿軒余、外ニ親類中弐拾軒余、新田あら町廿軒余、峠村是者兵作一昨年病気之節見舞被下候、心安者へ十五軒斗

				くばり申候、凡惣数百六拾軒程くばり相済
40	67	30	29	同日逗留ニ付八幡屋蜂屋泉屋御本陣よりもさかな被下外ニも組重ニ而仕出し、然ル処肥田九郎兵衛様森之助ニもいい田相済引取、九郎兵衛様直ニ私方江座敷普請御覧ニ御出被成種々掛物類御覧ニ入候処皆々畏ミ入御機嫌宜敷抹茶沢山ニ召揚り八ツ半時より薬師江入湯なから一盃召揚ニ直ニ私方より参り申候、森之助事ハ気分不宜甚顔色も不捷候ニ付直ニ帰宅被致候、右ニ付九郎兵衛殿ニも薬師より七ツ時御出立御帰り、半兵衛儀ハ暮合迄遊引取、私とも同様日暮前ニ引取申候
41	68	20	6	中津川肥田九郎兵衛殿福島江此間出勤御帰り御立寄被下候
42	68	20	23	肥田九郎兵衛殿福島より御帰り四ツ時御立寄本家ニ而御休
43	68	30	9	中津川宿市岡氏・肥田氏外平田先生門人衆中岩倉御兄弟御同勢御供惣連中御帰路ニ付大津屋娵いい田より召連御帰り拾三人御昼御休ミ
44	68	41	4	中津川肥田九郎兵衛殿千賀様御用ニ付当宿御泊り迄御出張被成、私方ニ御泊り被成候並鵜沼宿年寄壱人軍見分太田御陣や御差図ニより見届ケ方ニ江戸方迄参り候由私方ニ御泊り今朝御出立被成候
45	68	50	29	木曽谷中百姓壱騎蜜働隠り宿方百姓始メ妻籠・三留野・野尻・在方蘭村・柿其・与川其外在々不残凡人数千百五拾人余、中津川宿町端駒場村入口大橋迄誠ニ大群時の声上ケ落合より中津川大橋迄大変之事ニ相成御代官始メ並惣役人中揃方、以留メ申候様子肥田九兵衛殿ニハ直様尾州表江御達しニ参り候様子ニ噂承り申候
46	68	70	27	中津川肥田九郎兵衛殿福島御用ニ付俄ニ御主張被成御立寄有之候
47	68	80	13	中津川菅井嘉兵衛・九郎兵衛・源兵衛・落合庄蔵殿福島帰り八幡屋ニ休
48	69	40	15	中津川九郎兵衛・半兵衛・万兵衛殿三人福島宿甚兵衛様急ニ中津川江御引越ニ付御用有之御出役被成候様御断有之
49	69	40	21	中津川九郎兵衛・半兵衛・万兵衛殿右三人之衆中、当十五日福島宿へ御用ニ而御出張被成候処、御用済ニ付昨夜須原宿泊りニて御帰り立寄御上り申候
50	70	30	13	和泉や李助・大津屋森之助当時京都医師へ罷出療治被致候ニ付、附添ニ九郎兵衛殿代り合迄被頼参り候由今朝中津川出立被致候
51	70	50	8	夫より本町田丸屋へ参り同夜泊り遊申候尤傘おらいニ召使お梅共其節九郎兵衛殿おひさ並志水や久助殿御夫婦も御同様御上京医師様へ参り申候、菅井森三郎京都へ当春より医師へ罷出今ニ逗留被致候、泉屋李助殿ニも四月上旬森之助病気養生見届ニ参り居候処、此頃中皆々御出被成候ニ付廻り合ニ相成六月廿日京都出立廿六日ニ大津屋迄帰宅被致候、猶又田丸屋より帰り懸九蔵方ニ遊ひ三番（ママ）も皆々泊り又々傘江帰り申候

第6表　市岡長右衛門関係記事

番号	年：月：日			記　　事
1	27	61	26	同日親父サ山口へ参り申候、同夜中津川宿役人半兵衛殿・六左衛門殿・堀七殿・長右衛門殿、福嶋出府ニ付夜中御越被成候
2	39	60	15	中津川岩井助七殿・羽間杢右衛門殿・市岡長右衛門殿・菅井鉄七殿・篠原長八郎殿・上田庄蔵殿、福島御呼出ニ付御立寄被成候、銘々御土産被下候
3	39	70	2	中津川市川七右衛門殿・岩井助七殿・菅井鉄七殿、福島より御引取ニ付御泊り被成候
4	40	60	10	市岡長右衛門殿・菅井嘉兵衛殿両人福島より帰り御立寄被成候
5	40	60	10	山村大殿様御筆扇面並短冊壱枚市岡氏ニ申受候
6	42	30	14	中津川市岡氏・岩井氏外ニ弐人御知行所御役人福島表へ御出張ニ付仝ニ而蕎麦差上申候、峰谷勝七殿ニも御同伴ニ御座候
7	43	40	11	翁塚供養執行ニ付落合中津川御社中御出席被下候御名前　宗泉寺和尚様　御土産盃壱、かねさじ二本、市岡長右衛門様御土産品　徳利壱ツ、肥田與六様、羽間杢右衛門様　練羊羹箱入壱・半切紙百枚・地紙色扇子壱、羽間忠七様　箱入杯壱ツ・扇子壱対、外ニ長門屋友八　附添、落合鈴木利兵衛殿　是者此度宗匠代役御勤被下候、湯舟沢嶋田耕作殿　地紙包扇子壱・生椎茸壱連、山口外垣三左衛門様　御土産鶏卵十五
8	43	50	11	中津川市岡氏福島御出張ニ付御越被成御立寄被下候処、御早々ニ而直ニ御出被成候
9	43	50	25	昨夜嶋田耕作殿より手紙参被見致候処、中津川市岡氏・大湫村瀬氏御両人より御頼金之義ニ付、源十郎殿・私両人へ御頼状参り、正書相認メ差遣申候
10	44	30	15	中津川市岡氏当宿迄右御通行雇人馬之義ニ付御越被成御立寄被下候
11	45	70	12	中津川市岡祐之進殿御母公御死去ニ付香典悔状相添誂へ差遣申候
12	46	20	9	山口村久保田作人鍋吉親類並組合惣代として長右衛門参り、当午年より来申年迄三ケ年之間掟米八俵ツヽニ用捨いたし去巳年不足米之内六俵是ヲ弐俵ツヽ三ケ年ニ差立候様申聞都合当午ノ秋より三ケ年之間拾俵ツヽ無滞相立可申筈、屹度引合則親類組合證文一札請取申候
13	47	10	24	中津川市川長右衛門殿飯田行御立寄御年玉被下候
14	48	10	18	中津川市岡長右衛門殿茂八賀州様中山道筋御上り御通行被為遊候ニ付中通し人馬引合請方ニ江戸表へ御出被成

				候ニ付御立寄被下、則印判御誂へ申候
15	48	20	23	中津川市岡長右衛門殿先達而加州様此筋御通行ニ付人馬継立方ニ江戸表江御出府被成、御帰宿ニ付御立寄、たばこ入壱ツ土産被下候
16	49	20	12	中津川市岡氏飯田江御出被成扇子御土産御立寄有之候
17	49	40	27	山口村下モ畑惣兵衛・南野兵右衛門両家ニ而内輪不仲ニ相成、五ケ年以前巳年三月頃より両家共出入無之猶亦右両家故障筋ニ付、下モ畑組合中並ニ村方拾三組共附合無之、去ル巳年より当酉年迄五ケ年之間至而難渋歎ケ敷儀ニ付追々内輪之処聞合候処先年其砌村方ニ而組頭源十・桂次・忠右衛門右三人ニ而追々取扱候得共更ニ聞入無之、仍而此度親類金蔵・弥平両人召連、下モ畑惣兵衛方へ罷出、山口村取扱中源十殿・桂治殿両人相招キ外ニ惣兵衛方親類者ニて長右衛門・長六・五右衛門・半平下大畑熊吉、右之者も相詰居申候
18	50	20	11	中津川市岡勇之進殿伊奈行御立寄扇子壱対御恵被下候
19	50	30	18	与板庄右衛門殿参り長右衛門発起十五両無尽帳壱冊ニ三日之内かし遣受人祐蔵立引合申之
20	50	30	22	飯田松尾町湊屋仙吉方より金子三両頼有之候ニ付藤助と申仁中津川江此間参り今朝帰りニ付同人江三両相渡遣申候尤仙吉世話ニ相成候、市岡氏御主人中津川より苗木辺江先頃御越ニ而今朝御帰り一寸御立寄有之仙吉家内之事御挨拶申上御頼申候
21	50	120	15	中津川市岡長右衛門殿江去秋姫君様御通行ニ付燭台かし遣候処紛失ニ付代金ニ而金ニ而請取可申筈、右代金受取旁峠八蔵江手紙誂遣申候
22	51	40	11	白山寺人仏供養へ参詣、仙吉仕出し酒肴種々持参同勢十三人市岡氏御隠居並御二男中津川市岡氏幸イ彼地へ御出被成御逗留ニ付御同伴被成候、賑々敷事ニ御座候
23	51	40	25	市岡長右衛門殿飯田より帰り御立寄被下候
24	52	20	29	中津川市岡長右衛門殿飯田へ御越ニ付御立寄、扇子壱対御恵被下候
25	53	30	10	市岡長右衛門殿飯田行ニ付御立寄被下、扇子御土産被下候
26	54	10	18	市岡長右衛門殿飯田へ年始ニ御出被成御立寄、扇子壱対御恵被下候
27	54	90	6	中津川大津屋隠居葬式へ罷出候処折節芝居興行ニ付お半・長右衛門弐まく見物いたし泊ル
28	55	70	26	勝七向井様無尽一件ニ付中津川岩井迄参り候岩井代名古屋表へ御出府留主、市岡代一名村行留主
29	56	10	28	八幡御おつい三拾三歳厄御日待執行ニ而お玉・春七両人相招レ拙者へも種々馳走恵ミ被下候、為祝義酒壱樽さかな拙者より祝儀ニ中津川市岡氏御老母御認メ被下候、八十八歳賀之扇子壱本進上いたし候

30	56	40	30	中津川市岡長右衛門殿姉さま飯田へ御帰ニ付御土産も団扇壱本御恵被下候
31	56	90	12	山村旦那様恵那御登山中津川ニ六日逗留被遊御出立ニ相成、役人市岡・肥田・岩井久助・万兵衛・半兵衛・守三郎並落合宿庄屋殿御見送り御供有之、八幡屋源十郎方御昼休尤も御材木方成瀬新蔵様御昼休本陣入ニ付右御昼源十郎方ニ而相勤、源十郎義岩村留主中ニ而拙者共罷出万事取斗申候
32	56	90	12	御出立之砌肥田九郎兵衛・久助・万兵衛野尻迄御見送被仰付御供申候、市岡氏、杢右衛門殿・半兵衛・守三郎・庄蔵殿拙家へ御立寄ニ而暫休足被成、八ツ半時御帰宅被成候
33	57	90	8	中津川市岡御老母当九拾壱歳ニ而昨六日御死去ニ成候、香典線香弐把周蔵へ誂差遣申候
34	58	20	26	中津川市岡長右衛門殿・間杢右衛門殿福島宿へ出張御立寄扇子被下候
35	59	110	28	中津川市岡長右衛門殿先頃福島御出張御帰りニ付御立寄被下候処引籠罷在御目ニ懸リ不申候
36	60	20	21	中津川市岡氏飯田御立寄被下候
37	61	20	18	江戸本阿弥兼三郎殿西筋より宿々釼類目利被成候ニ付御頼釼類御覧ニ入候様太田宿より中津川江申参、中津川ニ六七日御滞留ニ而市岡・肥田御両人御添翰を以当宿本陣江御入来被成候、拙者共多用並焼失後万事取込ニ付得御覧ニ入不申候
38	61	100	3	島崎吉左衛門殿御通行人馬之儀ニ付京都迄罷出美濃鵜沼宿より本山宿迄人足中通しニ御願申上度道中御奉行様へ罷出候由ニ而中津川へ相見候、次郎平方ニ而御目ニ懸り暮合市岡七右衛門殿御同伴ニ而大湫宿泊りニ御出立被成候、万事大騒働ニ相成申候
39	63	70	27	中津川市岡氏御家内並馬島おきく飯田へ御出被成候ニ付御立寄被下御茶漬差上申候、広瀬泊りニ御出被成候
40	63	110	19	中津川市岡氏より当八月飯田行之節御茶漬差上申候右之為返礼と蒲鉾弐抱御恵贈被下候
41	65	51	18	大変之水ニ而峠三郎ぐり沢橋流失、長右衛門起し田少々川原砂入岩田裏川・塩沢川両川水相増大水ニ付峰屋洞田地源右衛門控・源十郎控とも流失水入畦かけ新湯井水堀候、源十郎控え分損し当時取手田地江ハ水通り不申候、拙家控坂吉之助作り川障自身起し畑流失、田砂入川除損し井水損候得共控年貢ニ無滞様子ニ有之候
42	66	50	13	兵右衛門上京長右衛門より書状ヲ中津川肥田より手続ニて届、病気も追々全快之よし
43	67	30	15	漸々十五日筆取覚有之候分書記申候、中津川市岡氏並田丸や、おすがサ子供召連傘半兵衛おはつ惣供迄拾人へ立寄茶漬振舞橋場広瀬治リニ而出立
44	67	40	8	昨日中津川市川（岡）長右衛門とのいい田より御帰りニ而御立寄被下候ニ付御泊り被下候、今昼時より御帰宅被成候

45	68	10	10	市岡正蔵殿・間半兵衛殿福島御用御出勤御立寄被下唐紙半切掛物一幅御恵被下候
46	68	10	18	中津川市岡氏・半兵衛両人共福島出勤御用済御引取ニ而裏道通りいつミやへ出、夫より昨暮れニ入直ニ御引取御帰宅之上京都辺江出勤罷出候様御噺有之候
47	68	30	9	中津川宿市岡氏・肥田氏外平田先生門人衆中岩倉御兄弟御同勢御供惣連中御帰路ニ付大津屋娵いい田より召連御帰り拾三人御昼御休ミ
48	69	40	9	傘おむゆどの安産後小児召連いい田より広瀬泊り御帰路、右者市岡氏御内室俄病ニ而昨日御死去迎参り俄ニ御帰宅被成候、鯵さかな土産被下候
49	69	80	3	市岡正蔵殿・落合上田庄蔵殿福島御用御出役御立寄被下候